

平山亮著『介護する息子たち：
男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房（2017年）

「息子」としての男性とはどのような存在か、また、どのような存在として理解されているのか。本書は、この「息子性（son-hood）」について、親を介護する男性の経験を通して考察している。

かつて、家庭で介護の役割を引き受け（させられ）ていたのは、多くの場合「嫁」だった。子ども数の減少、非婚率の上昇などの結果、介護者に占める「嫁」の割合は減少の一途をたどり、最近では「娘」を下回り、増加を続ける「息子」に肉薄されている。もはや息子介護者は決して少数派ではない。にもかかわらず、介護する息子たちの声が聞こえてくることは少ない。

介護に限らず、成人した男性の息子としての経験は、父や夫としての男性の経験、あるいは娘としての女性の経験に比して、語られることが奇妙なほど少ない。それは何故なのか。

一方、要介護高齢者に対する家族による虐待の加害者のなかで、息子が占める割合は4割を占め、娘（2割弱）の2倍以上である。この結果をみる限り、「息子介護」は大きな問題をはらんでいる。しかし、その原因を、男性の「暴力性」やケア能力の低さに求める見方を著者は否定する。

被害者の多くが母親であることから、息子による虐待は男性から女性への暴力としてみるべきで、加害者と被害者のジェンダーの組み合わせは無視できない、と著者は言う。他方で、老いた母親に「思わず手を上げる」息子の虐待は、典型的な夫から妻へのDVのような圧倒的な力（肉体的、経済的）の差を背景にしたものとは異なる。むしろ、家族における男性の「受動性」と「依存」が息子の虐待を「自然」なものに見せているのだ。

子どもは親に依存しなければ生きていけない存在である。男女とも、成長にしたがって親からの自立と自律を果たしていくが、その内実にはジェンダー差がみられる。男性にとって親との情緒的な繋がりは未成熟や依存を意味するものとして否定的に捉えられるが、女性にとっては親との情緒的な繋がりの維持や再構成が成長や自律の指標として意味づけられる。

主たる介護者として介護に携わる男性の多くは、実は女きょうだいや妻などの女性による「お膳立て」の上に乗って介護を行っている。親と同居する単身の息子の場合、この「お膳立て」が働かず、この類型が最も虐待の発生が多い。

介護に限らず、家庭内外の「関係調整」は見えない仕事（ケア労働）として女性が担っている。言い換えれば、男性の多くはそうした女性への依存を意識していない。自立・自律への規範に縛られていることが、自らの依存から目を背ける傾向に拍車をかける。

関係調整を担ってきた母親にもはや依存できず、むしろ母親の不可解であったり反抗的な態度に直面するとき、息子が不安や混乱から「思わず手を上げる」ことは、「おかしくない」こととしてとらえられる（もちろん、虐待しても仕方ないということではない）。

本書で、息子ひとりでの介護の危うさとして指摘されていることの一つとして、親の自立を保つという志向がある。息子たちは娘たちに比べて、親の「主体性」を尊重し、親の判断に委ねる傾向が強いという。「親はまだ大丈夫」と思いたいのだ。これは、見方を変えれば、相手の「弱者」性の否認によってしか、支配への傾向を抑えられないことを意味する。息子介護の問題は「どうすれば男たちは、弱き者を弱き者のまま尊重することができるのか」という課題を男性たちに突きつけている、と著者は語る。これは、子どもを育てる親にもあてはまるし、より広く「弱き者」に向き合う時にわたしたちに突きつけられる問いであろう。（湯浅 論）